

二〇一九年の短歌 谷岡亜紀

ここ数年の短歌で特筆されるのは、中堅女性歌人の目ざましい活躍である。栗木京子、小島ゆかり、水原紫苑、米川千嘉子、川野里子ら、一九八〇年代後半にデビューして「若手」として脚光を浴びた世代が還暦を越え、いま充実の時を迎えつつある。二〇一九年も、川野里子が短歌研究賞を受賞し、小島ゆかり歌集『六六魚』が前川佐美雄賞と詩歌文学館賞をダブル受賞した。また栗木京子歌集『ランプの精』は小野市詩歌文学賞を受けた。

特に世代共通のテーマとして老いた親を看取る歌が目を引く。「老親」の介護や死を通して人生という大テーマに直面し、改めて人間が生きて死ぬとはどういうことかが問い直される。そこにわれわれの紛れもない〈現在〉が立ち現れるのである。

一方、その一回り下の世代では、大口玲子と吉川宏志の社会的視座を持つ作品が特に注目される。大口は第六歌集『ザペリオ』を、吉川は第八歌集『石蓮花』を刊行した。

二〇一九年の主な受賞者は以下の通り。現代短歌大賞に高野公彦。短歌研究賞に川野里子。逍遙賞に内藤明歌集『薄明の窓』。斎藤茂吉短歌文学賞に春日真木子歌集『何の扉か』。詩歌文学館賞短歌部門に小島ゆかり歌集『六六魚』。小野市詩歌文学賞短歌部門に栗木京子歌集『ランプの精』。日本歌人クラブ大賞に来嶋靖生。日本歌人クラブ賞に本田一弘歌集『あらがね』と春日いづみ歌集『塩の行進』。同新人賞に

木ノ下葉子歌集『陸離たる空』。同評論賞に谷岡亜紀著『言葉の位相』。現代歌人協会賞に小佐野弾歌集『メタリック』。前川佐美雄賞に小島ゆかり歌集『六六魚』。ながらみ書房出版賞に鈴木陽美歌集『スピーチ・バルーン』と田中教子著『覚醒の暗指』。短歌研究新人賞に郡司和斗と中野霞。現代短歌評論賞に土井礼一郎。角川短歌賞に田中道孝と鍋島恵子。歌壇賞に高山由樹子。佐藤佐太郎短歌賞に谷岡亜紀著『言葉の位相』。若山牧水賞に黒岩剛仁歌集『野球小僧』と松村由利子歌集『光のアラバスク』。現代短歌新人賞に田口綾子歌集『かざぐるま』。

二〇一九年に刊行された主な歌集は他に、吉岡太郎歌集『世界樹の素描』、吉川宏志歌集『石蓮花』、川野里子歌集『歓待』、三枝昂之歌集『遅速あり』、大口玲子歌集『ザペリオ』、知花くらら歌集『はじまりは、恋』、古谷智子歌集『アルタ・シテイ』、本多稜歌集『六調』、坂井修一歌集『古酒騒乱』、加藤治郎歌集『混乱のひかり』、小池光歌集『梨の花』、篠弘歌集『司会者』、田中拓也歌集『東京』、松村正直歌集『紫のひと』、佐佐木定綱歌集『月を食う』、カン・ハンナ歌集『まだまだです』等。また主な歌書に馬場あき子著『与謝野晶子論』、佐佐木幸綱著『歌論集』、心の花の歌人たち、永田和宏著『象徴のうた』、伊藤一彦著『歌が照らす』、藤岡武雄著『近代短歌を探る』等。また笠間書院『コレクション日本歌人選』より今野寿美著『森鴎外』、佐佐木頼綱著『佐佐木信綱』、永田淳著『河野裕子』、盛田帝子著『天皇・親王の歌』、川野里子著『葛原妙子』、水原紫苑著『春日井建』が刊行された。

二〇一九年の物故者は、橋本喜典(享年九十)、山笠井喜美枝(享年八十九)、百々登美子(享年九十)、米田律子(享年九十)、大塚善子(享年七十九)、清田由井子(享年八十三)ほか。

(ブリタニカ国際年鑑二〇一九「短歌」に加筆し再録)